How is Wedding!?

本城沙衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｈｏｗ　ｉｓ　Ｗｅｄｄｉｎｇ！？

【Ｎコード】
Ｎ９３６８Ｋ

【作者名】
本城沙衣

【あらすじ】
お手数ですが、ＰＣからの読者様は、横書きにてお読み戴けましたら幸いに存じます。
：＊．；”．＊・；・＜；・：／（＊＜▽＜＊）／：・；＜・；・＊．”；：＊：
結婚式＆披露宴といえば、やっぱり花嫁さんが主役ですね。
素敵なドレスやお着物を着て、大好きな人とこれからず～っと一緒

♪なんて思ったら、それはもうリキ入りますよね。
それぞれのカップル様の志向を凝らした結婚式＆披露宴の形式も様々。

こちらでは、某雑誌取材で、あのバブル期を彷彿させるような、かなり現実離れをした超豪華結婚式を行ったカップル様の結婚式＆披露宴（新婚旅行）までを追ったドキュメンタリーです。

コメディタッチでお送り致しますｍ（＿＿）ｍ

ぷろろ〜ぐ

：＊．；”．＊・；・＜；・：／（＊＜▽＜＊）／：・；＜・；・＊．”；：＊：

花嫁さんの晴れ舞台　結婚式＆披露宴

超豪華婚……最近、あまり聞かないですね〜。

とはいっても、花嫁さんの多くは、何処かで“豪華”を望んでいるという統計が出ました。

とあるホテルのウェディング・サロンで、半年後に、それはそれは豪華な披露宴が行われると知った、我が編集部主任が、本城に半年の追っかけドキュメンタリーを強制。

実は、その時の本城。

心に失恋の痛手を抱えておりまして、かなり乗り気ではなく……当然ですよね、幸せ真っ只中のカップルの追っかけなんて、酷すぎる！

でも、業務命令なので泣く泣くＯＫして、カメラマンと二人三脚の追っかけの日々が始まったのでした。

あれ？

失恋の痛手など、一気に吹き飛んだ？

そんな感じの取材でした。

Ｃａｕｔｉｏｎ！！！

あくまで一般常識が通用しない御曹司との結婚式＆披露宴までのお話です。

なので、完全にリアル感はありませんが、取材に基づく実話です。

花嫁さんが語るこのストーリー。

これからご結婚される殿方様……女の子の気持ちがわかるカモ…です。

かなりの現実離れをしているところがあると思いますが、架空の世界ではございませんので、ご参考戴けるところもある……と思われます。

◆これぞ、御曹司　◆（1）（前書き）

ある、大金持ちの御曹司と恋に落ちて……大恋愛。

話はトントン拍子ですすみ、さて！

結婚式の準備だ～！

◆これぞ、御曹司　◆（1）

「ねぇ。結婚式場、何処にする？」

「君の好きなところでいいよ」

結婚が決まったカップルさん達の間で、よく聞かれるこの会話。

まぁ、大抵は、こんなカンジで話は進んで行くものです。

花嫁さんが主導権を握っているようなものですね。

「予算は？」

「う～ん……やりたいことしたらいいよ」

これも、よく聞かれる会話ですけれど、この次が違った。

「やりたいことって言ったら、全部になちゃうよ～」

「いいんじゃない」

よく聞かれると云えば、このお婿さんの言葉は、「だよな～」みた

いな感じですね。

それから予算などは二人で練ることになるのですが……。

「いいんじゃない」と即答のお婿さん

これは、御曹司たるお言葉ですねぇ。

たぶん、彼は、招待客の人数によって予算が決まるとか、オプションをつけたら、それだけ予算も跳ね上がることなんて、想像もしていないんでしょうね。

「やりたいことやったらいい」

そんな無謀なこと言ったら、花嫁さんは、ドレスから会場装飾、お食事、余興、引き出物…ｅｔｃ.

一番、豪華にしたくなるものです。

なんたって、お相手は、お金に糸目をつけない御曹司なのですから。

ここから、花嫁さんが語る、ゴージャス婚のストーリーの始まりです。

◆これぞ、御曹司　◆（2）

「やっぱり教会がいいかも」

と、言った私の一言で、ヴァージンロードを歩くことになった。

親のことを考えると、神前式にした方が喜ぶに違いない。

わかってるんだけどね。

娘の文金高島田……見たかったろうなぁ。

「ごめんね」と心で謝り、式は教会式にした。

やっぱり、ヴァージンロードは、女の子の永遠の憧れかも。

教会は、彼の知り合いの神父さまのいらっしゃる、都内某有名教会で即決！

ウェイディングに止まらず、都内有名スポットとしても沢山の雑誌に紹介されているその教会。

芸能人さんの挙式でも有名。

「友達に言ったら、すっごく羨ましがられるだろうな」

そんなことを考えていたら、つい、ひとりでニヤついてしまってい

た私なのでした。

さすが、有名だけあって、ヴァージンロードが長いこととといったら！

私のまわりでは、まだ誰も結婚式はしていなかったし、親戚の人でも、その教会での式はなかった。

偶然、彼の知り合いの牧師さんがいて、有名な教会だったので、下見もしないで決めてしまったものだから、初めて実物を見た時は、ただただ感動の嵐。

「ここを、何分かけて歩くんだろう」

ふと思ったことは、それ。

「すっごくゆっくり歩くんだろうし……父と練習しなくちゃ！照れるなぁ……」

次に思ったのが、これ。

外国映画でしか観たことがない、あまりに長いヴァージンロードに、ただただ圧倒されて、こんなことを思ってしまった私なのでした。

隣で、慣れたように平然としている彼を見たら、ちょっと悔しかったけれど、この現実は受け止めなければ！

これから、この彼とご家族の一員となるのだから！

嫁として！

神父様へのご挨拶を済ませ、彼の車が向かった先は、都内のレンタル・ドレスショップ。

彼の頭の中には“レンタル”の４文字は存在しないらしく、都内殆どのドレスショップをひたすら廻り回った。

「ドレス、レンタルなの？」

「好きなことをやったらいい」という彼の言葉に調子に乗った私は、そんなことを聞いていた。

当然、ドレスもオーダーでつくってもらえると信じて疑っていなかったから。

「だって、１回しか着ないんだし、もったいないじゃない」

これが、彼から出た言葉。

彼の辞書に「もったいない」なんて言葉が存在していたなんて！

よりによって、こういう処で、堅実主義にならなくていいのに～！

そうは思っても、彼が少しは私達と同じ感覚があることが判り、ある意味、ホッとしていたのも事実。

とはいえ、レンタルショップでの彼の言動は、やっぱり、私達が考える現実からは随分、かけ離れていたのも事実。

予算の上限を考えていない彼の様子を見た店員さんたち。

それは、後から後から、すっばらしいドレスのご紹介。

しかも、初日にして、何処のお店でも、私達はＶＩＰ扱い。

ナンダカンダ言っても、それはそれで気持ち良いものです。

ヴァージンロードは子供の頃からの憧れ。

その現実が叶う時……結婚式という現実。

その現実が目の前に来た時、一番最初に想像したことが純白のウェディングドレス。

ヴァージンロード以外での一番の理由は、純白のウェディングドレスを着たいからと理由で教会式にした私。

そのような訳で、妥協することは絶対に出来ないドレスのことだから、即決は出来ないのは当たり前ですね。

ん？

想像するレンタルとは違って、豪華すぎる数々のドレスに一発ノックアウトされた感もあったかも……。

そこでは、そんな態度は見せなかった……と思うけれど。
なんたってＶＩＰだし。
ＶＩＰなのは、彼なんだけれど。

そして、何日も、ただ、ひたすら披露宴会場廻り。
これまた、都内の有名なホテルばかり。
２か所、彼のご友人様が経営してるという、大きなレストランへも行った。
そこも、まぁ、すっごい有名なレストランだった訳で、知らなかった彼の交友関係にも驚きまくりの私。
またまた、現実のギャップを思い知らされることに……。
いや！怯んでいる場合じゃないし！
そう自分に言い効かせ、彼の後を着いてまわった、初期段階なのでした。

◆これぞ、御曹司　◆（3）

あ～！びっくりした！

どこのホテルでも、彼、ＶＩＰなんですよ。

“扱い”ではなく、正真証明のＶＩＰ。

ほとんどのホテルで、ほとんどの場所で顔パス状態！

これも、知らなかった彼の一面を見ることとなってしまった。

「そういえば、いつも予約なしでもＯＫだったな……」

デートの時、いきなり決めたホテルのレストランでも、いつも一番綺麗に夜景が見える窓際だったし、クリスマス・イブの時も、彼の出張が取り消しになって二人で過ごせることになった時も、予約なしでスウィートが取れた。

もともと御曹司様だから、ホテルのスウィートと聞いても不思議はなかったけれど、クリスマス・イヴに突然……というのは、これは信じ難かった。

「初めてのお泊まりだから、こっそり予約してくれていたのかな」

なんて、あの時はひとりで勝手に思い込んでいたけれど、またまた、この現実を見ると、あの時の「大丈夫だよ」と平然と言っていた彼

の言葉も頷けてしまった次第。

“こっそり予約”というロマンティックな妄想は見事に打ち破られてしまったけれど、これからを考えると、ちょっとだけ優越感にも似た感情が……。

やっぱり“彼が”ＶＩＰなんだけれど。

結局、何を基準に決定したかというと、都内で一番広い宴会場のあるホテルにした。

招待客の人数が半端じゃないということで。

まぁ、そういう状況の花嫁になってしまうと、会場自体は知名度があれば、それほど拘らなくなってしまうらしい。

一種、諦めモードみたいな感覚になってしまうみたい。

そこでも、予算はいくらでもいいらしい。

溜め息ものですね。

で、ドレスに戻ります。

何十件と廻った甲斐あり、オートクチュールの一点ものにした。

ドレスのドレーンの長さ?

たぶん、５ｍくらいあります。

ちびっこの私が、こんなに長い裾を引いて歩いていいのでしょう……か！？

店員さん曰く。

「お嬢様には、このくらい豪華で上品ドレスがお似合いですよ！」

「ヴァージンロードでも、素敵に映えますよ！」

そうかなぁ…？！

言い過ぎでしょ、それ。

「このドレスは、お嬢様のための一点ものですから、他に着ていらっしゃる方はいらっしゃいませんよ！」

満面の笑顔でそう言った店員さんの「一点もの」という言葉に落ちた。

お値段は……恐くて聞けずにいる、まだまだ御曹司様のお嫁様にはどうかと思う私がいたのでした。

パニエ＊は、３重のボリュームたっぷり。

ドレスに着られているみたいになっちゃったかも。

ベールもドレスに合わせて、総丈１５ｍ。

当然、特注だけれど、こんなに長くていいの？

何処かの国のお姫様じゃないんだから！

「教会でのお式ですから」

店員さんの一言に、またオチタ。

そしたらティアラ？お花？

迷ったけれど、これは、珍しく口を挟んでくれた彼の意見を尊重してティアラにした。

ティアラだけはレンタルにしたけれど、なんでも、警備員つきの代物。

ここでも、恐くて、お値段など聞けないでいる私がいるのです。

この時、彼は、いつか見た絵本でティアラをしたお姫様の絵を想像したらしい。

私にイメージしてくれてたんじゃないのか……。

レンタルとは言っても、結局は、デザインもお値段も（？）オーダー以上のようになっていた。

「もったいない」と言った彼の言葉の主語には、「保管場所が」と付けるのが適当だったようだ。

私からしたら、主語は「お金が」なんだけれど……。

＊

パニエ＝お嫁さんのドレスの下にはく、インナー。
ふ～んわりとしたイメージのドレスにはかかせない優れもの。
スカート型になっていて、形状記憶ワイアーが入ってカタチを固定。
1段とか2段が主流。3段は、かなりボリュームが出る。
それが、2重3重に重ねてあったら、もうゴージャス！！！
フランス人形をイメージしてくださいませ。

◆これぞ、御曹司　◆（４）

最終的に決定した白のウェディングドレスは、清楚で上品で且つ可愛い。

丈は、ｔｏｏ　ｍｕｃｈヒールでカバー。

ちびっこの私が、なんだかスタイル良く見える！

？ウェディングドレス”の魔力、オソルベシ。

「お友だちに自慢できるな～これ♪」

ドレーンは長すぎない方がいいけれど、それなりの教会なら長いのも、よしとしましょう！

半端でない長さのヴァージンロードがある教会に厳かに流れるパイプオルガンの音に合わせて、サラサラっとドレーンが引かれる音……そんなイメージ。

デコルテは見せすぎない方が私好み。

というか、彼の希望でもあるわけで、どうやら、人に私の肌を見られたくないというのが本心らしい。

けっこう可愛い彼なのです。

ウェディングドレスといったら、ずっと描いて憧れていたのは、フワフワ〜っとしてフリフリ〜っとして、お花がいっぱい！

という感じでしたけれど、選んだドレスは、意外にもシンプル。

デザインを含め、生地とかレースとかチュールとか……かなりの高級なものではあったけれど、パッと見は、うん、かなりシンプルに写るドレス。

シンプルなドレスって意外にいい……と、学んだ私でした。

と同時に、「要は中身」ということも。

?中身”とは、?着る人”も意味しているけれど、素材とか……ね。

素材が良いと、デザインシンプルでも、やっぱりどこか格調高く感じるものです。

もっとも、これ、人の人生とか、その人自身とか、いろんな場所でも例外ではないと、ドレス選びの時に悟った私。

御曹司との結婚で、金銭感覚はマヒしそうになった私ではありますが、ひとつ、人生について学んだのは、これまた意外。

お嫁様になるのか……なんてことも実感。

あ！！！

教会式の場合、エスコートする父親や新郎がいらしたら、『ドレスの裾を踏まないで！』と念を押しておくのを忘れずに！

あのヴァージンロードで踏まれた暁には……しっかりビデオに写りますからね！

ヨロヨロ～っとした？ふたりの姿”が。

ヴァージンロードが長いとか短いとか関係なく、とにかく念を押しておくことを忘れずに！

念を押しても、けっこう踏まれるんだけれど。

お嫁さんが、よろけない足腰を鍛えておけばいいのか……な！？

そのためだけに……はちょっと無理だわ～。

ここまでで、約1ヶ月。

ドレスの選び方のコツを掴んだ私は、次なる目標へ向かってGO！

なのです。

さて！

次はお色直しのドレスだわ！

それにしても、何回、お色直しするんだろう…？！

今はドレスのことだけしか、頭の中にないのです！

ふぅ…。

◆これぞ、御曹司　◆（４）（後書き）

◆これぞ、御曹司　◆了　次なるお話へ続きます。

◆花嫁の叫び！◆（1）

携帯の着メロがなった。

「〇〇〇ホテル・ウェディング担当の藤田ですが……そろそろ、具体的な打合せをさせて戴きたいと思いまして」

やばっ！！！

ドレスに気を取られていて、すっかり忘れてた！

“まだ半年も先”と思っていた私がいた。

ということは、太るかもしれないし、ドレスも気が変わるかもしれない！！！

ここまで来ても、まだドレスのことは頭にあって、ふと、そんなことを考えていたワタクシ。

「つきましては、先日、お渡ししました資料の内容をご検討いただきまして、ご都合の良い日にお越し戴けましたらと」

担当の藤田さんの、それはそれは穏やかな明るい声。
花嫁の焦りとは裏腹に、その余裕の話し方に、ちょっと救われた気分もしていた。

まだ、大丈夫なんだよね！

「わ、わかりました」

電話を切った後、藤田さんが言っていた、ホテルからもらったその資料を確認したのでした。

招待客リスト・招待状・配席・会場装飾花・料理コース・お酒・司会・ＢＧＭ・贈呈用花束・主賓・乾杯…ｅｔｃ．．．ｅｔｃ．．．！

あまりに細かくて、項目が多くて。

会社の仕事だったら、ウンザリといったところだけれど、ここは花嫁さんたる所以。

けっこう楽しそうだったりもするのです。

彼に聞いた。

「ご招待は何人くらい？」

「３００人くらい」

平然と答えた彼。

げげっ！！！

ある程度、想像はしていたものの、こちらは親戚が多いのに助けられて、せいぜい１００人程度。

まぁ、考えても、それだけは、どうにもなるはずもなく……。

想像しなくても、彼側のご招待の方々は、それなりのステイタスの人ばかりということは判ってはいたので、資料にのっていた様々な？もの”には、それなりのリキを入れないといけないはずで！

しかも、彼は３００人と言っていたけれれど、もっと多いかもしれないご招待の方々の人数を考えると、これは、早急の対処は必要不

可欠。

結局、ドレスに気を取られている場合ではないと、改めて気づいた次第なのでした。

◆花嫁の叫び！◆（2）

ご招待の方々……。

どう考えても、両家の招待客の比率が合わないので、両家合わせて３５０名ほどのご招待に押さえました。

強引に押えさせました！！！

これだけは、さすがの彼も多少、渋っていましたが、彼のご両親にも相談の上、仕方ないことと譲ってくれたようです。

それでも……？！

招待状の数は、ご夫婦を1通としても、、概算２５０通の招待状を出すことになる。

たぶん……と言わずとも、私が用意する羽目になることは判っている。

何に対しても「いいよ」と言ってくれる彼ではあるけれど、「任せるよ」という言葉が多い彼が、披露宴にそれほど興味を持っている

とも思えず、こういう準備も、絶対と言い切れるほど、私に任せるであろうことは、容易に想像がついていた。

何でも一緒に仲睦まじく寄り添って決めている他のカップルを見ると、多少、淋しさみたいなものは感じていたけれど、これから待っている豪華挙式&披露宴のことを考えると、そう感傷的にもなってはいられない状況でもあった。

ということで、マリッジブルーにはならずに済みそうだった。

「ご招待状はどうなさいますか？」

ホテルのブライダルサロン内にある、豪華な相談室のテーブルに向い合せになって座って、ニッコリ微笑んだ、担当の藤田さん。

「え？」

あれ？ホテルで用意してくれるんじゃないの？

「最近は、手作りウェディングが流行っていますので、どうなさるかなと」

「あ、そういうこと……」

と、納得している場合ではない！

とんでもない！

そうでなくても、他に大変なことがありそうなのに。

「いえ、ホテルのでお願いします！」

彼に相談する余裕もなく即答。

「宛名はいかがされます？お嬢様がお書きになられます？」

またまたニッコリ藤田さん。

冗談でしょ。

「ホテル様でご用意をお願いさせていただけましたら幸いに存じます！」

またも即答。

しかも、何故か、かなり丁寧な言葉で即答。

変な丁寧語だったけれど。

「ご料金かかりますが……」

「構いません！」

当然、これも即答！

「通常、印刷の方が多いのですが、オプションで手書きというのも……」

藤田さんの説明が終わらないうちに、「手書きのオプションで！」と答えていた私がいた。

彼側のご招待の方々の層を考えると、“毛筆手書き”の招待状の表面が一瞬にして目に浮かんだ次第。

料金割増しについては聞かなくても判っていたので、敢えて聞くこ

ともなく、藤田さんも、先ほどからの私の即答ぶりを見てか、追加料金のことは詳しくは説明して来なかった。

「こちらにご料金が」といって、パンフレットのようなものを見せてくれただけであった。

「では、手配などがございますので、ご招待の方が決まり次第、リストを送ってくださいね。パソコン添付で構いませんので」

「い、いつまでに……ですか？」

「遅くても、来月下旬くらいにはお願いしたいと」

相変わらず、ニッコリ藤田さん。

結局、全員のリストアップはすることになるのね……当然か。

ホテルへ送るリストは、ナントカというパソコン機能を使って、きれいなフォーマットで彼に送ってもらうことにしよう！

パソコンは不得意なワタクシ。

こんなところで、つまずいてはいられない現実。

とはいえ、招待状のリストアップがこれまた……。

席次表にも使うからと、それぞれの肩書きも書かなくてはならないらしい。

まぁ、これだけは彼の協力がないと出来ない作業なので、少し安心。

なんといっても、彼の方のご招待客様の方がはるかに多いのだから。

そんなこんなで、昨今、流行っているという“手作り”とは程遠く、披露宴に関係するペーパーアイテムは、全て、ホテルのもので準備することにしてしまったのでした。

＊＊＊＊＊＊

※披露宴に関係するペーパーアイテム：招待状、席次表、お食事のメニューなどです。

◆花嫁の叫び！◆（3）

取り敢えず、その夜、彼へ電話をして、ホテルへの提出用の招待客リストは作成してもらうことになった。

これは一安心。

ただ……私の方のご招待客を、如何に多く集めるかが問題！

集めるって……おもてなしなのに……こればかりは、私でも納得できない作業。

とはいっても、席のこともあるし、あまりの落差もつけることも出来ずに、普段はほとんど付き合いのない、遠〜〜〜い親戚までリストに入れた。

幸い、父方が地主の家系であったので親戚だけは多く、そこは助かった。

私も、習い事だけは沢山していたので、その先生や生徒さんまでリストに入れさせてもらった。

やっぱり、友人だけは、現在進行形で付き合いのある友人しか呼べないし。

それでも、まだ少ない……結局、母の趣味サークルのお友達までご招待ということに。

なんだか、フクザツ。

知らない人がいっぱいいる自分の披露宴。

フクザツ……。

そんなこんなで、私の方は、予定通りの人数のご招待客になった訳なのでした。

次の打ち合わせが、お食事。

コースが5種類。

“特別ナントカ”コースを合わせると計6種類。

これは、さすが、双方の親に相談した。

彼のご両親も私の両親も、“食”に異様に拘るタイプなので試食ということに。

グルメな両親たち。

一発で一致！

これはラッキー！

思った通り、特別ナントカというコースで一致。

他のコースは目もくれず、その特別コースに即決。

“特別”と付くだけあって、他のコースよりも、素材も含め、品数もはるかに良かったらしい。

双方の両親が言うのだから、間違いはないでしょう。

そして、披露宴当日はたぶん、食べることが出来そうもないので、ここぞとばかりに食しましたの、ワタクシ。

いくらなんでも、高砂のお席で、スピーチして下さっている来賓の前でムシャムシャとはいかないし。

私も友達側ならともかく……。

ここも相変わらずスンナリと運んだけれど、披露宴での食事がお一人様¥３７，０００－（飲み物：ワイン・シャンパン等１０種・税込み）

概算。

¥３７，０００×３５０名＝¥１２，９５０，０００也

な、なんだ～！！！

ケ、ケタが違う！

計算違いじゃないの？

高級車２台は買えちゃうじゃない！

「親、ちゃんと計算したのかな……」

ひとりでブツブツ言っている私の隣で、彼はＯＫサインを出していた。

なにが、ＯＫなんだか！

食事だけですよ～！

ＯＨ　Ｍｙ　Ｇｏｄ！！！

◆花嫁の叫び！◆（4）

とは思ったもの、よく考えてみたら、親たち関係もご来賓リストにかなりあることだし、ご祝儀……がある。

「これ、けっこう返ってくるものなのよ」と、何かの情報誌で読んだことがある。

もしかしたら、＋一《プラマイ》したら、案外、黒字になったりして！

ひとり、ほくそ笑む私がいたけれど、そんなこと、口が裂けても言えるはずもなく。

それでも、こっそり、見込み計算に余念がないワタクシでもありました。

で、次は何かしら？

もう既に優先順位も判らなくなっている私がいた。

あれ程、騒いでいたドレスは何処へやら。

打ち合わせのことで担当の藤田さんから電話があった時に、「お花」という言葉が出た。

何の？

ブーケはドレス関係だし……。

あ！高砂の席とかウェディングケーキのテーブルとか、ご来賓席とかのお花だ。

「いろいろございますが、どのプランになさいます？」

数回目の打ち合わせで、ホテルのブライダルサロンを訪れた時に、披露宴用のお花が載っているパンフレットを開いて見せてくれた藤田さん。

「一番豪華なのでいいよ」

と彼。

出た！その一言！

その時は、珍しく、彼も一緒だったのです。

「パンフ、見ないの～？」と聞いた私に、「一番豪華だったら、間

違えないでしょ」だって。

それはお料理と一緒で、間違いはないかもしれなけれど、なんて単純。

お色直しとかや会場の雰囲気に合わせなくちゃ！

ピンクのドレスにピンクのお花なんてヤダ。

「お色直しのドレスが決まってからでいいですか？」

すかさず聞いた。

やっと、私の頭の中に“ドレス”の存在が蘇った瞬間。

「アレンジとかは、希望できます？」

と付け加えた。

アレンジとかを加えたら、またまた料金がかかるのは判ってはいたけれど、聞いても聞かなくても、彼は「いいよ」と言うに決まっているので、ここは私がひとりで主導権を握ってしまった。

お花のパンフレットを見せられ、今まではドレスだけは譲れないと思っていた私の中に、“お花”が加わった。

ドレスとお花は、やっぱり譲れない！

乙女というものです、ここが。

「それは大丈夫ですよ。プランのお花を基準にアレンジをご相談させていただきますね。お式の1ヶ月前までにお決めくだされば大丈夫ですよ」

相変わらず、にっこり藤田さん。

ここも、ひと段落。

彼はというと、途中から外へ出て行ったと思っていたら、ロビーのラウンジで煙草を吸っていたらしい。

「まったく！」と思いながらも、「お花だからね」と、自己完結。

いつもの一抹の淋しさはなかった。

冷たい彼ではないけれど、女心がイマイチ判っていないのが、唯一

の欠点。

?一緒に”に意味があるのですよ、女の子は。

ある日、彼の実家へ呼ばれた。

◆花嫁の叫び！◆（6）

既に両家の挨拶は済んでおり、仲人さんとの顔合わせは来月で、結納はその次の月の大安吉日。

『今日は大安でも友引でもないんだけどな』

彼の実家では、私は何故かＶＩＰ。

どうしてか解らなかったけれど、たぶん、男兄弟だから、女の子が珍しかったのかしら！？

「主賓をお願いする方なのですけれど……」

おしとやかな口調で、お母様が言った。

「参議院の〇〇さんにお願いしようと思うのだが」

どこか威厳あるお父様がおっしゃった。

ひぇ～～～！！！

出た！政治家さん！

「どうような、お知り合いで……？」

「私の古い友人なんだよ」

高級そうな葉巻を吸いながらお父上。

私の中では“お父様”から、瞬間“お父上”となっていた。

確か情報誌とかには『主賓は上司とかが多い』とあったけれど、やっぱり富豪たる所以なのだなぁ……と、変に感動してしまった。

と同時に！

「この結婚式、もしかして、私が思う世間的なことは通らない！」

と実感した瞬間でもあったのでした。

ひぃ～～～！！！

だったら、私の主賓は？

当然、上司と思っていたけれど、これでは、社長クラス！？

無理だ。

一応、一般的には大手と呼ばれる上場企業のＯＬではあるけれど、社長までの距離が遠すぎる。

確か、友達に政治家さんの息子がいた！

だめよ！

同い年で主賓はないでしょう。

大学の恩師！

“名誉教授”だったら大丈夫！

けっこうお世話になったし、その教授もリストに入っている！

え？今、イギリス？

しかも、ただでさえ落差あるご招待人数なのに、一人減った……。

完全に凹んだ。

やっぱり事前に上司に情報を教えておくことでＯＫと、勝手に自己完結していた私。

なんだか、疲れてきたかも～。

それにしても、お色直しのドレスは、いつになったら試着できるのかな。

◆花嫁の叫び！◆（7）

気を取り直して、会社の休み時間に彼へ電話した。

「ねぇねぇ、お色直しのドレス、見たいんだけど」

「今度の休みに行く？」

やった～～～！！！

そんなに沢山のドレスを持っていても何ので、カラードレスはレンタルにした。

披露宴を行うホテルは有名なギャラリーと提携しているので、持込みの手間などを考え、ホテル内で決めることにした。

彼との電話を切った後、即座に、藤田さんに連絡した。

「ご覧いただいても、もちろんかまいませんが、来月、新作会もありますから、それまでに大体の流れをお決めになられてはいかがでしょう？」

ああ！お色直しの回数とかか……。

それもそうだわね。

で、結局、お色直しのドレス選びは来月に持ち越しの運びとなりました。

うるる。

そういえば、彼。

登場回数、少なすぎると思いませんか？

申し訳ございません。

でも、仕方ないんです……。

何を聞いても、相談しても、「君の好きなものでいいよ」、「一番、高いのにすれば？」、「豪華な方でいいよ」と言われるだけなので、登場と台詞がないんです。

全く興味がないわけではないらしいのです。

最初の頃と比べると、けっこう熱心に行動はしているので。
招待客リストも一生懸命につくってくれているらしいし。
というわけで、これからも登場回数は少ないと思いますが、ご了承くださいませ。

さて、次なるはウェディングケーキ。
情報誌によると、『新婦の手作り』が流行っているらしい。
これも、例の“手作り”結婚式の影響。
でも、この結婚式では、私の手作りは……完全に無理！

彼からの言葉は想像は付くけれど、一応、ホテルのウェディングケーキの種類が載っているパンフレットを見せた。

「どれにする？」
「一番、高いのがいいよ」
ほら！きた。

“高い”というのは、ウエディングケーキの高さのことです。
当然、その高さに比例して、お値段も高くなるのは必然。
それは、彼にもわかっていることでしょう。

ね、こんなカンジなのです。

「天井の高さもございますし、ご新郎様のおっしゃるとおり、高さがある方が素敵ですよ」

と藤田さん。

この笑顔にには、かないません。

お菓子作りだけは得意なワタクシ。

やっぱり作りたいよ、ケーキ。

『二次会で作ろうかな』

あ！二次会とかはどうするんろう！

ドレスと思ったら披露宴のことになり、今度は二次会へと考えが及び。

一体、この先、どうなるでしょうか。

数か月なんて、あっという間に決まってるし。

◆花嫁の叫び！◆（8）

披露宴に、彼、お友達、全員呼んでなかったし……。

私側へ合わせてくれてのことなので、これにはかなり申し訳なく思っていた。

当然、するよね。

念のため、聞いてみた。

「二次会ってするの？」

「するよ」

やっぱりね。

「当日？」

「いや」

「いつ？」

「ハネムーンから帰って来てから」

「ハネムーンって、何処？」

「フロリダ」

『なに、勝手に決めてんだよ～！！！！』

初めて喧嘩になった。

といっても、私が一方的に喧嘩していただけだけれど。

「何処、行きたいの？」

涼しい顔をして聞いてきた。

やっぱり彼は、喧嘩とは思ってないらしい。

ちょっと悔しいかも。

「カナダ！」

私も負けじと即答で返した。

「いいよ」

な、なんだ〜〜〜！

こっちも即答？

「じゃ、帰りにフロリダへ寄ろう」

何だか、とっても嬉しそうに、そう言った彼。

今まで、結婚式&披露宴関係の話の中で一番、嬉しそうな笑顔だったので、その案にのった。

カナダ⇒フロリダだって！

というか、理由はともかく、誰でものるでしょ、これは。

一瞬の喧嘩も、一瞬のうちに何処へやら。

「二次会は？」

「友達に頼む」

これもラッキー。

することが１つ減ったので、二次会は彼に全面的に任せることにした。

彼のお友達なら、安心していてよいでしょう！

と、またもや自己完結して、大きく頷いていた私がいた。

『あ……そうだ。また、２次会用のドレスとか選ぶのかなぁ。まさか、式用のボリュームたっぷりじゃ、恥ずかしいよね』

面倒なような……。

でも楽しみなような……。

でも、これで、もうひとつドレスを選ぶチャンスが増えた♪

やっぱり楽しみ〜♪

ひゃっほ〜〜！

◆花嫁の叫び！◆（9）

招待状を出す前に、とりあえずは友人たちに報告義務。

大学時代からの親友や身近かな友人へは、彼からプロポーズをされた次の日には報告していた。

彼が大会社の御曹司ということや、直接、彼に会ったことがある友人は、彼と結婚することについては、当然といったようなリアクションだった。

この挙式&披露宴のことや、これまで成り行きを聞いたら、たぶん、悲鳴もの！？

ということで、詳細までは話してはいなかった。

何だか、自分が恥ずかしい気分だったから。

しばらく会っていない友人には、初めての報告。

恥ずかしながら電話した。

「私だけど……」

「あれ。久し振り！元気？ど～した～？」

けっこうご無沙汰していたとはいえ、まぁ、相変わらずの友人たち。
察しのよい子はというと……「今頃電話してくるってことは、結婚〜？」だって。

「お相手、どういう人？いくつ？どこで知り合ったの？」

「いつ？」

「何処でするの？」

久し振りの友人からは、この3つは必ず聞かれるもの。
で、私が彼のことを話すと、「きゃ〜〜〜〜〜！！！」と電話口で叫び声が聞こえる。
初めて聞かされる方は、それは悲鳴にもにた声で叫びたくなるかもです。
身近かな友人にも、詳細までは話せなかった事実もあったことだし。
私も、最初は“花嫁として”叫びまくっていた訳で。
彼は、そのくらい知名度ある良家の御曹司という訳なのです。

結婚は、友人の中では一番早い。

当然、皆さん、華の独身。

「ねぇねぇ！彼のお友達も来るんだよね？」

あったり前のことを聞いてくるものだ。

「どういうお友達？席、近くして～！」

で、彼の友人たちのこと話したら、またもや雄叫び。

「きゃ～～～～～！！！」

「何、着ていったらいい？」

「振袖？」

「ドレス？」

友人たちからの、このような言葉。

電話で何回聞いたことでしょう
。
披露宴会場は、大きな合コンの場であるらしい。
お見合い好きのおばさま方の絶好の機会でもあるらしい。
年頃の子供をもつご夫婦も、何気に見定めるとか？
『新郎・新婦のご友人なら』という安心感があるあらしい。

というか！

「私を見て～～～～！！！」

ということで、結局は◆花嫁の叫び◆という運びになる訳です。

◆　花嫁、ダウン　！！！　◆　（1）

花嫁本人としては、友人のドレスを選んでる暇はないものの、やはり、ここは、お人よしのワタクシ。

あれやこれやと、友人の相談にのっている始末。

『私ものってもらいたいなぁ……』

「ともあれ、お色直しのドレスとカブらないように！」「私より目立たないで！」と念を押しておいた。

私の友達、綺麗な子が多いからね。

ここは、念には念を入れて、ダメ押し気分で友人に何度も言った。

これは、もう？お願い”に近い。

あと、４ヶ月くらい先なので、それまで、少しは落ち着いてくれることを祈り、「招待状待っててね～♪」と〆た。

スピーチなどは、親友・先輩・上司・同僚。
これは決めてあるので問題なし！

さて、気を取り直し、残っている細かいことは、さっさと片付けてしまいましょう。

引き出物？

ここからは、親たち交えたほうがよさそうだわね。
なんたって、彼のご両親の関係の皆様方。
若い感覚で選んでしまって良いものかどうか、かなりビミョーだし。
ホテルの引き出物のカタログを持って、近々、彼のご実家へお邪魔することにした。

◆　花嫁、ダウン　！！！　◆　（2）

なんだか、最近、疲れた。

仕事もあと、2ヶ月で辞めるのに、引継ぎとかあって、なかなか休むことが出来ない。

新作ドレスの発表会が来月に迫ってるし、今、倒れる訳にはいかないわ！

と、自分に言い聞かせていたはずなのに。

あれ！？

あれ……？

なんだか、目が廻る……。

あれ……ダメだ……！

それから意識がない。

気が付いたら、病院だった。

会社から帰ってくるなり、家の玄関で倒れたらしい。

「過労ですね」

「はぁ」

とほほ……。

「栄養を採って、安静にしてれば大丈夫ですよ」

病院のベッドで横になっている私に、お医者さんが言いました。

「もうすぐ、結婚式なんですってねぇ？」

ニコニコ顔の看護士さん。

「花嫁さんは大変ですからねぇ。今日は点滴しておきましょうね」

優しそうな人でよかった。

すぐには家へは帰れたけれど、少しの間、静養することにした。

点滴の薬が効いてきたのか、そのまま熟睡モードへ突入してしまっていたのでした。

◆　花嫁、ダウン　！！！　◆　（3）

一晩、入院して、その次の日には退院した。

家で静養中、彼が何度も何度も来てくれたらしいけれど、その度に私は熟睡していた。

「もう！起こしてよ！」

「だって、「可哀想だから寝かせてあげてください」っておっしゃるから……」

おっしゃる～～～？

なぜに、婿に対して敬語使うかなぁ？

「やさいい方でよかったわねぇ」

ウキウキの母。

このようなことも、何故か精神的に意外と疲れる。

これじゃ、何処にいても同じじゃないね！

また、熟睡してしまっていた。

私、どうかしちゃったのしら？

なんだか眠い……。

念の為に……ご懐妊ではございませんでした。

会社を休んでいる間に、情報誌にのっているドレスを見ていた。

可愛いのばっかり♪

あれもいいなぁ。

こっちもいいかも！

やっぱり、ピンクとかがいいのかなぁ！？

などと、ニヤニヤしていた。

雑誌でこんなに目移りするのだったら、実際にお色直しのドレスを

目の前にしたら、どうなっちゃうんだろう？

二次会のドレスもあるんだっけ。

白のドレスだけでも、けっこう悩んだし。

何だか、また疲れてきた。

これが過労とういうものなのかな。

贅沢な過労だと言われそうだわ。

ふぅ……寝よう！

◆　親たちの暴走　！！！　◆（1）

あ～～～～！！！！

1週間、寝込んでしまった……。

あまりに眠かったせいで、うちの母親。

「ひとりで悩んで苦しむ前に、お母さんに相談しなさい」だって。

何事かと思ったら、どうも“妊娠した”と思い込んでいたらしい。

『出来ちゃった婚！？』

先にも申し上げましたが、それはございません。

うちの母親も気が若いというか、なんというか…。

結局、ただの過労でした。

やっと復活した私に待っていたものは、病床の中で見たカラードレス！……ではなく、引き出物。

ここで、やっと、親たちの出番となった訳です。

情報誌によると、ご来賓がお帰りの際、荷物が少なくてよいということで、最近は“カタログ”が流行っているということ。

「ランク付けされてるんだ～」

ご祝儀に合わせて、１万円・２万円・３万円・５万円・７万円・１０万円・１０万円以上コースとありました。

内容を見たら、けっこう素晴らしい品々。

１０万円コースなんて、有名ブランド品のオンパレード。

和物だったら、何とか塗りとか、数十万はするようなものとか。

ご祝儀の金額も様々なら、それに見合った引き出物の方が割りが良い。

しかも合理的！

最初にこのカタログの企画を立ち上げて現実としてくださった、どこぞの企業様に感謝すら覚えたほど。

しか～し！

親たちは、そう甘くはなかったのでした。

やっぱり、一筋縄ではいかないものです。

なんとも渋い器を強烈に押してきた次第。

骨董品屋さんで、一番上に飾ってあるようなカンジの代物。

決して、悪くはないけれど……素敵は素敵なのだけれど……私たちの年代には、どうだろう！？

私が独身でもらっても嬉しくないかも。

将来の嫁入り道具にもなりそうにないし。

彼はというと、「まかせるよ」だって。

また出た！「まかせるよ」の一言。

もう、この頃になると、その言葉にもいちいち反応しなくなっているワタクシがいたのでした。

引き出物で火がつき、親たちの暴走が始まり……あの試食の時は、ほんの助走にすぎなかったのでした。

◆　親たちの暴走　！！！　◆（2）

メインのお品と鰹節、引き菓子。

これで充分と思いきや、なんと、彼のお父様のお知り合いの漆職人さん特注！“夫婦箸”を付けると言い出した。

それに対し、私の父。

知り合いの陶芸家さんにに“夫婦茶碗”を頼むと言い出した。

私の父も、張り合うことはないのに……まったく。

考えてみたら、お箸だけなら、いっそのことお茶碗も一緒の方がいいのかな……予算に上限はなさそうだし。

“ここだけ”は私もそうは思ったけれど……夫婦茶碗とお箸を更に追加？

冗談でしょ〜！！！

メインはメインであるのに！“

正に、“暴走”とはこのことだと実感。

どちらも譲らないわけなのです。

やんわりとした口調の中に火花がちっているのがハッキリと見える！

と、いう訳で、ここは母親同士がお互いの“つれあい”への説得に。

といっても、これは、私が頼んだわけなのですが。

私の父はともかく、彼のお父様に意見は申せません。

こういうことの主導権は、やっぱり奥さんにある！？

母親たちの説得にはそう時間もかからず、父親同士の見えない火花を散らしたバトルに、あっさりと終止符が打たれたのでした。

結局、年配の方へは有名陶芸家さんの印のある『夫婦茶碗』。

年若い人には有名漆職人さんの『夫婦箸』。

どこで、年配の方と若い人をわけるかというと…？

両親たちの知り合い・関係者が“年配の方”。

私達の友人・知人が“若い人”。

ただし、私たちの友人・知人に、恩師・上司などの年配と呼んでもおかしくない方には、“年配の方”となり、一件落着。

ところで、メインの引き出物は？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9368k/

How is Wedding!?

2011年10月6日02時51分発行